

## 別紙 2

### 論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 森本幸子

被害妄想は臨床場面で頻繁にみられる現象であり、最も極端な形態として統合失調症の被害妄想がある。被害妄想ほど強い確信ではないものを被害観念というが、これは健常者にも見られる。被害観念は他の精神病理との関連も強いことが知られており、被害観念のメカニズムの解明と介入方法の開発は臨床的にみて大きな意義がある。本研究は、青年期後期にあたる大学生における被害観念の特徴を記述し、その発生メカニズムを明らかにしたものである。論文は二部より構成される。第一部（研究1と研究2）では、被害観念の特徴を明らかにした記述研究であり、第二部（研究3～研究5）は、被害観念の発生メカニズムを体系的に調べた発生研究である。

第一部の研究1では、まず、先行研究を総説し、被害観念の特徴を包括的に記述するための多次元尺度を開発した。この尺度を用い、大学生を対象として、被害観念と、同じく妄想的観念であるがその内容が大きく異なる庇護観念とを比較した。その結果、被害観念は苦悩や関心が強く、他方、庇護観念は観念の強さによって特徴付けられることが明らかとなった。こうしたことから、妄想的観念を研究する際には、内容ごとに発生メカニズムを検討する必要があることが示された。

研究2では、研究1で作成した多次元尺度を用いて、大学生を対象に、被害観念と、抑うつ自動思考と強迫観念を比較した。その結果、被害観念は、抑うつ自動思考や強迫観念に比べて、苦痛度や違和感が高く、訂正不能性や頻度が低いことがわかった。また、被害観念と抑うつ自動思考とは、苦痛度の高さと訂正不能性の低さで類似し、一方、被害観念と強迫観念は、確信度の低さで類似することが明らかとなった。臨床的に重要であると考えられる苦痛度や違和感に注目すると、被害観念は強迫観念よりも抑うつ自動思考に近いことが明らかになった。こうした知見は、被害観念への治療的介入において示唆に富むものである。

第二部では、大学生における被害観念の発生に関する3つの研究を行った。研究3と研究4では、素因ストレスモデルを用いて被害観念の発生について検討を行った。素因ストレスモデルとは、ある一定の素因を持つ人がストレスを体験したときに精神病理を発症するというモデルである。先行研究では、被害観念の素因となる心理的要因を特定したものもあるが、こうした研究は、横断調査法を用いているために、その心理的要因が、果たして被害観念の素因なのか、あるいは被害観念の結果にすぎないのかを区別することができ

なかった。そこで、本研究では、縦断調査法（パネル調査法）を用いて、2時点において被害観念を測定し、その両時点の被害観念の差を、前もって測定しておいた素因が果たして予測できるかを調べた。これによって、横断調査では得られない因果関係に一步踏みこんだ知見を得ることができる。データの分析に当たっては、第2時点の被害観念を従属変数とし、第1時点の被害観念を共変量とし、素因、ストレス、素因とストレスの交互作用をそれぞれ独立変数とする階層的重回帰分析を用いた。こうした研究の結果、「恨み」「否定的内容の幻聴様体験」および「社会的場面回避傾向」という3つの素因において、ストレスとの有意な交互作用が得られた。すなわち、これらの素因を持つ人は、ストレスを体験したときに被害観念を持ちやすくなることがわかった。したがって、こうした素因を持つ人に対して介入を行うことで被害観念を予防できる可能性があることが示唆された。

研究5では、大学生における被害観念と、小・中・高時代のいじめの被害体験の関係について調べた。過去のいじめ体験の頻度、いじめ被害体験の種類、そしていじめ体験による影響との関連を調べた。その結果、いじめ被害体験の種類や情緒的不安定といういじめによるマイナスの影響が被害観念を予測した。この結果より、過去のいじめ被害体験や、いじめによって情緒的に不安定になったことが現在の被害観念に関係していることがわかった。

なお、以上の研究の実施にあたって、倫理的な配慮は十分になされていると確認された。

本研究においては、とくに次の諸点が高く評価された。

- 1) 被害観念について、包括的に測定できる多次元的尺度を作成し、その信頼性と妥当性を明確にするなど、質問紙データの信頼性を高めるために細心の注意を払い、また、800名に及ぶ多数の調査データを積み重ねて、実証的な議論を組み立てていること。
- 2) 先行研究のような横断調査ではなく、縦断調査を取り入れることによって、因果関係に踏みこみ、先行研究の限界を越えようと試みたこと。これによって、被害観念の素因となる心理的な変数を初めて因果論的に同定することに成功したこと。これによって、被害観念の発生メカニズムについて因果にふみこんで記述することができたこと。
- 3) こうした実証研究を積み上げることによって、被害観念の治療や早期介入に役立つ確実な情報を提供したこと。

これらの成果により、本論文は博士（学術）の学位に値するものであると審査員全員が判定した。

なお、研究1は「心理学研究」誌上への掲載が決定しており、研究4はすでに「性格心理学研究」誌上にて公表済みである。さらに、研究5は「心理学研究」誌上での掲載が決定している。